なまけもののおかみさん　リトアニア

昔むかし、なまけもののおかみさんがいました。おかみさんは、麻糸(あさいと)をつむぐのが仕事でした。けれども、麻の畑に行っても横になって眠(ねむ)ってばかりでした。いつも、

「これはあしたの分、これはあさっての分、だから今日は何もすることがないわ」といって、仕事を先(さき)のばしにしました。麻は、畑に放りっぱなしでした。

あるとき、旦那(だんな)さんが、畑から、麻のたばを少しだけ持って帰ってきて、

「おまえ、せめてこれだけでもつむがないか」といいました。おかみさんは、

「だって、糸車が、こわれてしまったんですもの」といいました。

「糸車のひとつぐらい、木を切って作ってやるさ」

旦那さんはそういって森へ出かけていきました。

おかみさんは、すぐに森へとんで行って、高いもみの木によじ登って、旦那さんが来るのを待ち受けました。旦那さんは、森にやって来ると、木を切り始めました。おかみさんは、おごそかな声でさけびました。

「糸車を作る者の妻(つま)は、死ぬ運命にあるぞ」

旦那さんは、びっくりぎょうてんして、家にとんで帰りました。

おかみさんは、先まわりして家に帰っていました。そして、

「おや、糸車はどこにあるの」と聞きました。旦那さんはいいました。

「それがなあ、おまえ。森の中で神さまが、おれに、『糸車を作るものの妻は、死ぬ運命にある』とおっしゃったんだ。糸車なんかのために、おまえを苦しませたくない」

ある日、村で結婚式(けっこんしき)がありました。おかみさんと旦那さんも招(まね)かれました。けれども、おかみさんのたった一枚のブラウスは破(やぶ)けていました。これでは、恥(は)ずかしくて結婚式に行けません。そこで、ブラウスを貸りに、旦那さんを、おとなりのうちに行かせました。ところが、おとなりさんも、ブラウスは一枚しかなかったので、貸してもらえませんでした。そのおわびに、がちょうを一羽くれました。

旦那さんが白いがちょうを抱えて帰ってくるのを見て、おかみさんは、ブラウスを貸してもらってきたのだと思いました。そこで、破けたブラウスを脱(ぬ)ぐと、さっとかまどに放りこんで、燃(も)やしてしまいました。

旦那さんは、がちょうを持って帰ってきましたが、それがいったい何になるというのでしょう。お

かみさんは、結婚式に行きたいのに、着るものがありませんでした。

旦那さんは、さんざん考えたあげく、わらたばの中におかみさんを隠して、それを馬車の御者台の下に置いて、結婚式に出かけました。そして、宴会場の戸口のわきに、おかみさんの入ったわらたばを立てかけておきました。旦那さんは、ときどき出てきては、ごちそうを少しずつ持ってきて、おかみさんにやりました。ところが、しばらくすると、よっぱらったお客たちが、みんな、外に出てきては、何も知らずに、わらたばに向かって用を足しました。

つぎに旦那さんが出てきたとき、おかみさんはさけびました。

「後生だからわたしを連れて帰ってちょうだい。これからは、砂がはね飛ぶほど、麻をすくわ。耳が熱くなるほど麻糸をつむぐわ」

それからというもの、おかみさんは、ほんとうに、砂がはね飛ぶほど麻をすき、耳が熱くなるほど、麻糸をつむぎました。それで、暮しも豊かになって、みんなを食事に招くほどになりました。そして、村で結婚式があると、いちばんの上座に座らせてもらって、ごちそうをお腹いっぱいいただきましたとさ。

村上郁再話

資料『世界の民話33リトアニア』鬼頭恵美子訳／ぎょうせい